アメリカに渡った清沢満之の精神

——野口善四郎参加の1893 Chicago *World Parliament of Religions* をとおして——

樋　口　章　信

1　はじめに

1893年，すなわち明治26年5月1日から10月31日までの間，アメリカ・シカゴで「コロンビア世界大博覧会」が開催された。1889年のパリ万国博覧会をはるかに凌ぐこの催しのために，ミシガン湖に沿って数多くのギリシャ建築風の威風堂々とした建物が建造され，シカゴは白亜の都市（White City）とのニックネームをつけられるほどであった。総予算28万ドル，総入場者2750万人という，当時としては破格の博覧会であり，シカゴ市ならびにアメリカ合衆国が大きなエネルギーを注いだイベントであった。コロンブスのアメリカ大陸発見400年を記念してのものである。コロンブスの所業が「新」大陸「発見」なのか「異」文化「侵攻」なのかという問題も含め，この博覧会についてさまざまな読みかたも現在できようが，この考察はその博覧会に付帯した「万国宗教大会」，特に野口善四郎の口頭発表についてである。このことを取り上げた動機のひとつは，前年徳永（清沢）満之が著した『宗教哲学骸骨』の野口英訳本 *The Skeleton of a Philosophy of Religion* が大会において紹介された事実を重視する故である。現在でも満之は欧米でその存在を充分認知されているとは言えないのであるが，欧米にはじめて満之の著作が紹介された画期的な事件として重く見たい。また英文『骸骨』にたいする欧米人の反応についてはかならずしも正確な記述がなされてきてはいない。ひとつには，野口の発表がどのようなものであったかについての総合的紹介がないからであろうと思われる。野口が参加したこの大会の概要ならびに意義とその英訳『宗教哲学骸骨』（*Skeleton*）紹介の実際について考えてみることが今回の考察の目的である。

2　1893年「万国宗教大会」

(a)　大会とその主旨

「コロンビア世界大博覧会（World's Columbian Exposition）」にはさまざまなテーマをもった他の大会が付帯していた。その多くは5月15日から10月28日のあいだに開催された。なかには医学から文学に関するものまである。もっとも人々の注目を惹いた大会はふたつあった。ひとつは「万国婦人会議（World's Congress of Representative Women）」であり，もうひとつは「万国宗教大会（World Parliament of Religions）」であった。前者は婦人参政権運動史においても意味のあるものである。「万国宗教大会」は9月11日から27日の17日間シカゴ市内のコロンブスホールにおいて行われた。

準備委員会はすでに1891年に組織され，チャールズ・ボンニー（Charles Bonney）大会長の下，プロテスタントの第一長老教会牧師であるジョン・H・バロウズ（John H. Barrows）が大会準備委員長をつとめた。バロウズによってまとめられた大部の大会記録が1893年に出版されたが[(1)]，開催の目的を次のように述べている。

第一　世界諸大宗教の代表者を招集して，古来未曾有の会議を開く事。

第二　世人をして諸宗教が通有せる真理の重要なるものは何なりや，又幾何ありやを知らしむる事。

第三　冷淡の念を抱くことなく又形式上の一致を為すことなく，親話懇談相互の情意を斟酌して，以て異宗教徒間に同胞友愛の情誼を厚深ならしむる事。

第四　達弁の人をして，各宗教が教ゆる所の緊要特色なる真理を演述せしむる事。

第五　有神論の動す可からざる論拠を示し，不生不死の理体を信仰するの理由を明にして，物質的哲学に反対する勢力を一致せしめ強固ならしむる事。

第六　婆羅門教，仏陀教，孔孟教，波斯教，回々教，猶太教，基督教及びその他の教を代表する学者をして，各宗教がその人民の文学，技芸，政体，及び家庭社交の生活に及せる精神上の効果等を，充分精密に述べしむる事。

第七　各宗教が，他宗教に如何なる光明を与へしか，又与へ得る乎を査究

する事。

第八　地球上首要の国民間に於ける宗教の現状を，精密に，確実に調査して之を記録に上せ，以て永久の保存を期する事。

第九　宗教が現時の大問題，殊に節慾，労働，教育，貧富等に関せる重要なる質問に，如何なる光明を放射す可き乎を究明する事。

第十　万国間の平和を永久に維持せんが為，地球上各国民をして益々友愛の情誼を結ばしむる事。[2]

これらは当時の興味ある諸問題を彷彿とさせる。たとえば第五項の「有神論の動す可からざる論拠を示し」という論点は「物質的哲学に反対する」ためにもちだされたものである。空想的社会主義からいわゆる科学的社会主義へとイデオロギーは展開を進め，同時にまた私有財産そのものを否定する無政府主義も人心を把捉しつつあった。一部の世界は唯物論にもとづく社会に向かって歴史が揺れ始めており[3]，産業革命を経て飛躍的に生産力が増大しつつある，イギリス，アメリカといった自由主義経済圏における産業資本主義世界にとっては，いやがおうにも危機感が増すばかりだったのである[4]。

(b)　日本からの参加者たち

日本からは釈宗演（臨済宗），芦津実全（天台宗），土岐法竜（真言宗），八淵蟠竜（熊本県・雑誌『国教』主幹，浄土真宗本願寺派）そして通訳をかねて大阪在住の居士野口復堂すなわち野口善四郎の５人が出席した[5]。また現地からは本願寺派の平井（竜華）金三も参加した。神道からは柴田礼一，キリスト教者として参加したのは小崎弘道，そしてハーバード大学在学中の岸本能武太であった。10の代表的宗教，40以上の宗派によって150を越える口頭発表がなされたのである。参加した聴衆は3000人とも5000人とも言われる。以下，日本人発表者のテーマは次のようである（括弧内の説明＊は釈宗演の記録である[6]）。

９月13日（三日目）

野口善四郎　「世界の宗教（The Religion of the World）」

平井金三　「日本における基督教に対する実況（The Real Position of Japan toward Christianity）」

柴田礼一　「神道（Shintoism）」

（＊九月十三日半晴。此日，日本出席委員野口，平井，柴田の三氏演題朗読の日にして，聴衆いよいよ多く，５千人を容るべきコロンビアンホールのみに入るべからずを以て，亦他のワシントンホールにおいて世界宗教討論会を開き，日々，遅れ馳せに到着せしものの便利に供す。）

９月14日（四日目）

土岐法竜　「日本における仏教とその宗派の歴史（The History of Buddhism and its Sects in Japan）」

９月16日（六日目）

八淵蟠竜　「仏教（Buddhism）」

９月18日（八日目）

釈宗演　「仏教の要旨ならびに因果法（The Law of Cause and Effect as Taught by Buddha）」

９月20日（十日目）

小崎弘道　「日本における基督教の現在及び将来（Christianity in Japan; its Present Condition and Future）」

９月21日（十一日目）

芦津実全　「仏陀（Buddha）」

９月26日（十六日目）

岸本能武太　「日本における宗教の将来（The Future of Religion in Japan）」

その他，本人の参加がなく論文が代読された（９月26日）ものに，横井時雄の「基督教とは何か――極東からの声（*What is Christianity? Voice from the Far East.*）」があった。セイロン（スリランカ）のダルマパーラの発表（*The World's Debt to Buddha*）やインドのヴィヴェーカナンダの論考（*Hinduism*）も大きな反響を呼んだ。代読ではあったが，マックス・ミュラーも論文（*Greek Philosophy and the Christian Religion*）を寄せている。大会全体にわたるテーマを紹介する余裕はないが，1893年のこの規模の大きい宗教会議は，明治期における世界宗教のありようを比較的に考察する場合，興味深い資料を提供するものであることは確かである。

3　大会参加への課題

(a)　最終参加者たち

各宗協会は仏教各宗派の管長からなる組織であった。明治25年７月の定期総会において，大会に代表を送ることは協議されたが，連合体として派遣することは否決された。最終的に各宗派として送ることになったのである。参加することになったのは釈宗演，芦津実全，土岐法竜，八淵蟠竜そして野口善四郎の５人であった。「同委員長バーロス博士より南条，島地両氏に紹介し，其来会を促がせしに付南条氏は未定なるも，島地氏は可成は出席せんと希望し居らるる由。（中略）尚，又徳永満之，井上円了，藤井宣正，薗宗恵等の文学士へも招状を発せし由」という記事も見受けられることから，真宗関係では南条文雄や島地黙雷のみならず，満之の名も上がっていたことが看取される。

東京芝の下青松寺において彼ら５人は準備会をもった。同席した人々は百数十人にのぼり，そのなかには沢柳政太郎，大内青巒，井上哲次郎，加藤熊一郎，堀内静宇，平松理英など官界ならびに各宗派の論客が揃っていた。各宗協会側の参加否決は大きなダメージであった。さらに状況を消極的なものにしたのは，ある在米の雑誌記者からの「大会は真個に彼等の正道を慕ふ誠心より自然に発起せられたるものにはあらで，全く彼等の教会の虚光を閃めかし，天下の蒼生を瞞着せんとの野心より発したる示威的強迫運動に過ぎず候」という書簡であった。これにより島地黙雷らの派遣は見送られることになったのである。

個人の資格にせよ，日本からの参加者を送るについて，準備会をもつことは堀内静宇（『浄土教報』主筆）たちの主張するところであった。[(7)] 外山義文は『明教新誌』誌上で各宗協会に対して要望を出したが，堀内も同じような立場から均衡のとれた見解を披瀝した。

> 全体感情の上よりして之を謂へば耶蘇教徒の発起に係り，耶蘇教徒の会長たるべき此大会議に臨席するは多少意に慊如たる所なきにあらざるべしと雖も，苟くも其結果にして仏教に裨益する所あらん乎，何ぞ其会の何人の開設に係り，何人の会長たるを問ふの必要あらんや。唯期する所は仏教遠大の利益にあり。[(8)]

積極的大会参加への主唱者は外山義文，佐藤茂信，堀内静宇，伊達霊堅，岩堀智道の五人であり，賛成者には南條文雄，釈宗演，島地黙雷，土宜法竜，芦津実全，大内青巒，在田彦龍ら，二十一名が名を連ねている。「万国宗教大会に就て仏教有志家の告白」という見出しで，次のような告文がそれら有志によって雑誌『宗教』雑録欄に掲載された。

> 吾人は仏教の現勢に鑑み，将来に偉大の計画を要すべきを察し，本年米国シカゴ府に開設せらる可き万国宗教大会議と日本の仏教とは重要なる関係ある所以を陳述して，各宗協会へ申告せり。此際，各地方有志の諸君に告白して，吾人の意見に賛成を乞はんが為，「宗教」を借りて之を茲に公にす。(9)

それに続く「万国宗教大会議に就て各宗協会に望む」では，「此空前絶後の機会に遭遇しながら，深く其利害を極めずして唯だ困難の一事を以てたちまち之を否決するが如きは余輩仏教の為に深く之を悲しまざるを得ざるなり」と憂慮の念を表している。このシカゴにおける未曾有の大会を最終的にどのようなものとしてとらえるべきかということは，ある意味で現代にも通ずる課題であろう。理念的マクロ面を見失ってもいけないが，現実的ミクロ面を無視してもならない。諸状況のなかで公平無私な宗教対話がどこで成立するかについての考察が前もって必要かもしれない。

(b) 沢柳政太郎の大会観

視角が違って興味深いのは，満之の学友・朋友である沢柳政太郎の大会観である。当時沢柳は文部書記官という役にあり，すでに明治24年にはシカゴ万国博覧会出品取調委員と博覧会事務局評議委員を委嘱されていた。日本から釈宗演，芦津実全，土岐法竜，八淵蟠竜そして野口善四郎の５人が参加したことはさきに述べた。それぞれの意識の持ち方は当然異なる。だがそのなかにあったのは世界の宗教事情に学ぶということよりも，むしろ大会において仏教の存在を鼓舞することにあった。各宗派の代表に対してこれは宗教的対話をなす場合，もしその方向だけならば，ときに交流の蹉跌となる要素である。沢柳は特に渡米仏教者四人に対して次のようなメッセージを送っている。

所で今回は万国宗教会議といふ，宗教の会議を開くので，此は政府からするものでは無くして，有志者が米国シカゴの博覧会を機として，開会するので，其会に我国へも委員の派遣を乞はれ，四高僧が遂に其会議に出席する事となり，四高僧は予め打合会と云ふ様なものを開かれ，互の意見を述べ，開会の暁は万国の人に向て，大に仏日を輝かすと云ふ御所存だそうで，実に喜ばしい事で，此万国会議と云ふものを世間の者は格別に申しませんが，我が仏教上から見る時は，実に大切なことで，充分に注意をせねば成らぬことで，私は此四高僧に重大の責任を望むことで御座います。（中略）私は実は，此の万国会議に余り重きを置かんので御座います。（中略）所で私が望むのは，高僧方が御いでになりましたら，彼等は宗教に於いて如何なる考へを有して居るかを視察せられん事であります。[10]

沢柳が送ったこの言葉は，欧米人の宗教観を十分視察して帰るべき点を指摘したことにおいて，まさに正鵠を射ている。堀内とはまた異なったアングルで冷静に大会を見ていることがわかる。明治26年といえば，すでに日本は帝国主義的資本主義期に入っている。[11] 富国強兵策がある程度成功をおさめてはいたが，日本がまだ依然として西欧から学ぶべき段階にあることを沢柳は自覚していた。伝統の異なる宗教との対話を考える場合，その成立史的相違点を客観的に考察しなければならないことはいうまでもない。自己の向上・深化・内省への意欲に基礎を置いた上で，対話者相互の相違点に関するその具体的内容への認識をもたなければ，対話・交流そのものが成立しないからである。そういう意味で釈宗演の『万国宗教大会一覧』はひとつの業績であろう。

(c)　徳永満之のその頃

満之は当時どのような状況下にあっただろうか。大谷派本山は御影堂と阿弥陀堂の再建のため，その負債を償却しようとしており，教学のための予算的余裕がなかった。明治21年26歳で京都府立尋常中学校長として赴任し，同時に高倉大学寮にも出講していた満之は，明治23年頃から『歎異抄』を手元に置き，禁欲生活を始めていた。母が歿したのもこの頃であり，教学的独立を同志と主張しようとしていたのもこの時期であった。明治25年８月東京・三省堂より『宗教哲学骸骨』が出版された。翌年まさにシカゴ万国宗教大会

が開催されつつあるとき，府立尋常中学を京都府に返還し，満之は大谷尋常中学を開校しようとしていたのである。教学の独立は学制の改革から始められなければならなかった。沢柳政太郎はそのような時に，満之の願いを受けて，京都の大谷尋常中学校校長ならびに大谷派の教学部顧問として東京から招聘されたのである。

満之は5月，人見忠次郎宛ての書簡で「京都は三大事件中特に博覧会，記念祭に付き，新聞上及び実地上繁劇の模様」と記しているが，これは明治28年の「遷都1100年記念祭」や「内国勧業博覧会」の準備のため，府が繁忙を極めていたからである。シカゴの万国宗教大会に関する満之の記述はないが，教学システムの改革を中心にして諸事万端多難な時期であり，満之にとっては海外のことを振り返る時間はなかったであろう。

4　野口善四郎の発表について

(a)　一般読書界からの期待

『明教新誌』明治26年9月4日号は「“The Skeleton of a Philosophy of Religion” Prof. M. Tokunaga 著　Mr. Noguchi 訳」と題して次のような記事を載せている。

> 本書は今回シカゴ大会に持ち行かるるものの中，もっとも普通的なるものにして，僅々七十五頁の中，よく仏教哲学中の大問題を網羅して，簡易に説明せられたるものにて先ず宗教を論じ，平等差別より進んで霊魂論に入り，次で成道の因果を論じ，善悪の標準，安心起行，大覚涅槃に及ぶ，簡にして明なりと雖も，為に説明の足らざる心地するを免れず。然れども，もとより宗教哲学の骸骨なれば，深く責むるは吾人の誤りなり。早稲田文学の記者が，「著者の如きは，真に当代の活語を以て其の信ずるところを語るものと云ふべし」と云へるは過言にあらざるなり。行文通暢明快いといと解し易し。

ここでは『骸骨』が普通的，つまり普遍的・一般的な仏教思想の紹介書として推賞されている。早稲田文学の記者の言を待つまでもなく，当代の言葉で語った清沢思想が欧米に紹介されることにたいする期待は大きかったであろう。

(b)　発表原稿

野口の発表は明治26年９月13日（大会三日目）であった。*The Religion of the World*というその発表はどのようなものだろうか。同年バロウズによって編集されたテキストと翌年ウオルター・R・ホートンによって編集されたものとがある。[12] バロウズ版によって野口の主張した内容を箇条書き的に述べると以下のようになろう。

1　四人の僧侶の通訳に多忙で準備ができなかった。
2　コロンブスの発見を思い起こしつつ，このすばらしい世界博覧会がとりおこなわれたが，同じように日本も長い鎖国のまどろみから目覚めしめられ，この博覧会を開催しているアメリカならびに他の文明諸国の偉大さをまのあたりにしていること。
3　ペリー提督は日本にとってコロンブスに比せられるが，また開国を強く押し進めた井伊直弼も忘れられない人物である。
4　開国以来，36年が経過したが，わが国ではすばらしい変化・発展が遂げられた。ペリーの国，つまりアメリカこそがこのような文明的発展を遂げせしめてくれた国である。
5　日本からのその返礼には茶碗や絹織物のようなこわれやすい「物質」ではいけない。仏教こそアメリカにお礼としてお渡ししたいものである。
6　そこで仏教書の翻訳がこれから話をする四人の僧侶たちによってあなた方に手渡されるであろう。それらは『大乗仏教大意』『真宗大意略説』『真宗問答』『四十二章経』などである。
7　これらに加え，今回この四人の僧侶からの贈呈としてはじめてアメリカに大蔵経400巻がもってこられたが，これらが英語に翻訳され，世界の人々に読んでいただけることを願う。また私自身が英訳した徳永教授の『宗教哲学骸骨』をお渡ししたい。
8　世界には多数の宗教宗派があるが，真理がひとつである以上，究極的には宗教の数もひとつである。２点間の最短距離が直線であるような，その直線にあたる宗教を見つけださなければならない。
9　世界に多数の宗教が存在する限り，それらの宗教はすべての観点において十全なる発達を遂げたとはいえない。
10　もしそれらが十全なる発展を遂げたとするならば，信仰と理性，宗教

と科学とのあいだの垣根がはずされていなければならない。そのことこそが我々の目標であり，この大会もその方向に向けてのものであろう。

野口の論稿は仏教や諸宗教に関する学問的な考察ではない。通訳として同行した在家居士としては，もとよりそのような意志もなかった。同行した釈宗演は上記の要点をさらにまとめて，次のように記している。

次ぎの登壇者は野口善四郎氏なり。その主意は，「コロンブス，アメリカ大陸を発見せし偉功は，もとより空前絶後，貴国が大博覧会を開催してこれを祝する可なり。万国競うて出品するまた宜なり。三十年前まで熟眠せし我が日本国民を覚醒せし貴国水師提督ペルリ氏は，我に対するコロンブスなり。その名目異なれども，その意一なり。今やコロンブス博覧会に際して，我れ既に物質的出品を為す。この博覧会付属の宗教大会議，豈に別に為すところなくして可ならんや。何を以て宗教大会議に出品せん。唯一の仏教のみ云々。」学説，理論，縦横馳騁の中に氏の如き演説あるも，又愛嬌あり。[13]

「学説，理論，縦横馳騁の中に氏の如き演説あるも，又愛嬌あり」といった釈宗演の表現からもわかるように，野口の発表にたいしてやや冷淡の気味がある。実際，仏教の学理が縦横無尽に展開されるというよりも，聖典翻訳や究極的真理に関する指摘など，東西間宗教対話における基本的問題の存在を再認識するレベルのものであった。上記（10）で「理性」と「信仰」という点に触れていることから，満之の『骸骨』が，発表の際，野口の心底にあったと思われる。他の発表についてここでふれる紙数はないが，野口自身の報告によれば，「十一日平井金三氏到着同日は万国宗教大会開始期日にて歓迎会あり，野口氏総代として答辞を述ぶ。孰れも都合よく，就中平井氏の演説は非常の喝采にて，満場ハンカチーフを揮り，声を発して賞賛し，各新聞も好評を為す。十五日は土宜師の演説平井氏代読し，是れ又喝采，日本宗教家の面目を施せり。[14]」とある。『明教新誌』も，「我が社が通信を嘱託せる野口善四郎氏，世界の宗教と題して，世界の宗教は皆一なりと論じ，拍手の中に壇を下り，[15]」とあるから野口発表に対してもかなりの反響はあったのである。

さらに別の雑誌に「万国宗教大会実況」と題する野口自身による報告が掲載されている。そこにおいても「何れも大喝采一も非難の声を聞かず」という印象が述べられている。参考箇所を引用する。

恐くは世人の想像外ならんと察するものは今回の市俄高万国宗教大会にして，少しも会議の風なく由て議長，本員，多数，少数等の文字は少しも必要を見ず，唯だ各宗代表者が思々に各自の意見を紙にして自ら之を公衆の前に読み，或はこれを代読せしめ，疑義あるものは散会後各宗各自の室に来て演者に質すの例なり。（中略）余は日本仏教徒の資格を以て四師を代表し簡単に答辞を陳ぶ。柴田氏の答辞はバロース氏之を代読す。（中略）釈師は因果の理をバロース氏に代読せしめ，芦津師は仏陀という題にて之亦バロース氏に代読せしめ，土宜師は仏教の歴史を平井金三氏に代読せしめ，八淵師は仏教という長文を余をして代読せしむ。余は余自らの世界の宗教という題にて簡短に諸師の演説に先んじて弁せり。何れも大喝采一も非難の声を聞かず。

この後，野口も平井金三の発表が「開会中最大一の大喝采と大名誉とを博せられたる一事」であったことにふれ，シカゴの新聞のみならずアメリカの各地方新聞によって報道されたことを伝えている。平井は野口とは異なった文脈で，キリスト教国がいかに「日本に対せる亡状無礼」を示したか逐一例示して，満場の慚愧を誘ったのであった。[16]

(c)　野口テキストにおける *Skeleton* への言及

上記の（7）にあたるバロウズ版の野口による『骸骨』への言及箇所を引用する。

I have devoted some years and am now devoting more years to learning English, for the purpose of doing this in my private capacity. But the work is too hard for me. For example, I have translated Rev. Prof. Tokunaga's work without any help from foreigners, on account of the want of time. I am very sorry that I have not enough copies of that book to distribute them to you, for I almost used them up in presents on my

way to this city. Permit me to distribute the ten last copies that still remained in my trunk to those who happened to take seats nearest me.

私は数年間英語の学習に身を献げてきましたが，さらに私の個人的能力において，今後何年もかけてこの目的のために学んでいくつもりであります。しかし私にとってその仕事は余りにも困難なことであります。たとえば，私は徳永教授の著作を，時間がなかったことから，外国人の助力もまったくないままに英訳いたしました。残念ながら皆様方すべてにお渡しできるほど十分ございません。というのは，この街へやってくる途上，ほとんどすべてを贈呈してしまったからなのです。失礼ですが，私のトランクの中にまだ残っておりました最後の十部だけ，たまたま私の近くの席に座っておられます方々にお渡しさせていただきます（試訳）。

上記から分かるように，10冊の本しか手渡されていない。それも「たまたま野口の近くの席に座ってい」た人々にであった。手渡された人々がどのような人であったかも知る由はない。まして『骸骨』を読んだ上での反響ということになると，今のところ知るすべはない。西村見暁師によると「同氏（野口善四郎）からのシカゴ便りに，『骸骨は大評判にて，当市学者間の流行書の如く皆々閲覧致しくれ候』と記されている[17]」とあるので，大会会場の出版物展示場において閲覧できるようになっていたことも考えられるがその実際は知るすべもない。

5 おわりに

満之の『宗教哲学骸骨』の詳細な紹介が実現されるべき環境下であれば，アメリカにおいて興味ある真宗思想交流の芽が生まれたかもしれない。しかし，来集した世界の宗教が，やや過熱気味の大会，それも万国博覧会に付設された会議にあって，野口の口頭発表中の上述のコメントだけであったとすれば，満之の思想にたいして十分な反響を生じたとはいえないだろう。しかし強調されなければならないのは，後の思想的因子が詰め込まれた『骸骨』が，シカゴにおいて世界の宗教者に手渡されたという事実である。我々はここにまで立ちもどって考えてみたい。この素朴な事実にもどって，我々は海外にむけての従来の真宗思想紹介ならびに相互交流の歩みを振りかえってみ

る必要がある。

1893年，明治26年という年は，「維新・開化」以後の日本宗教の歩みを点検する意義深いエポックである。ひとまずの欧化を踏まえ，あらたに絶対天皇制にもとづく強固なアジア版植民地主義・産業資本主義を形成しようとする時期である。それは上からの，すなわち国家権力側からもたらされた近代化であった。このような時に，言うならば下からの，草の根民主主義・自由主義を骨太に実現しようとするアメリカで「万国宗教大会」が開催されたのである。民衆本位主義という点を日本と比較すると，大量の移民を受け入れながら職業の機会を提供してきたアメリカに軍配が上がるであろう。だが「～からの自由」というレベルではなく，精神的意味において絶対的自由を問題にするならば，いずれが本来的自由であるかは議論のあるところであろう。絶対的に自由な心的世界を求めての，米国民におけるここ数十年に亙る禅仏教の隆盛は周知の事実である。

米国において，近代ヨーロッパ思想を媒介した日本の仏教哲学書が初めて手渡されたのは，この1893年を嚆矢とする。この野口による満之思想紹介の年を任意に「国際真宗対話元年」とすることによって，諸宗教との交流史における諸課題を考える出発点が与えられるのではないだろうか。百年前のシカゴにおける万国宗教大会への日本仏教界の関心は，当時の諸雑誌を見る限り，相当なものであった。ところが同じシカゴにおいて1993年に開催された百周年記念大会はほとんど日本において注目を浴びなかった[18]。この百年間にわたる真宗と他宗教の相互交流を検証してみることは，我々の現在立っている場を確認する上で意義のあることではないかと思われる。宗教間の対話交流を単に知的ゲームのようなものであると考えることは間違いであろう。文化・文明間の衝突は今後より重大な局面を迎えることが予想される。国外，国内を問わず，人と人とが出会い，それぞれの価値観・信条・体験等に関して自由かつ虚心坦懐に話し合える場がその実ますます少なくなってきている。いま「踊って」いるのはマスコミと海外への観光客のみのように見える。大げさな表現ではあろうが，対話的場の回復は先達が培ってきた文化的価値観を崩壊させつつある現代文明における緊急課題なのである。

残念ながら野口の発表によって満之の精神がアメリカ大衆にかならずしも十分理解されることはなかったが，我々はとりわけ明治期の日本人がいかに積極的に自らを語ろうとしたか，自らの宗教的信念を表現しようとしたかを

この万国宗教大会への取り組みにおいて見たような気がする。いま過去における我々の営為を深く省みることに未来へのひとすじの希望の鍵があるのではないだろうか。

註

(1) John Henry Barrows (ed.), *The World's Parliament of Religions* (2 vols), Chicago, The Parliament Publishing Company, 1893.

(2) 『宗教』第18号，294-5頁。

(3) ドイツでは「共産党宣言（1848）」が発表され，フランスでは「二月革命（1848）」が起こった。その流れのなかで1864年に「第一インターナショナル」が形成され，また1889年には「第二インターナショナル」が組織された。「パリ・コミューン（1871）」もヨーロッパを揺るがした。

(4) 1886年にはすでに「アメリカ労働総同盟（AFL）」が結成されていた。

(5) 前年11月の段階では大谷派からは南条文雄，本願寺派からは島地黙雷が出席の予定であった。しかし雑誌『仏光』の在米記者の報告がきっかけとなり，これはキリスト教の拡張主義によるのではという疑念が広まり，各宗協会の定期総会において，日本仏教代表ということではなく，個人的資格による参加ということになったのである。『明教新誌』3179，3181号。

(6) 『釈宗演全集』第１巻，昭和５年，平凡社，126-7頁。釈宗演による記録『万国宗教大会一覧（明治26年12月出版）』である。

(7) 『明教新誌』3265号，3255号（明治26年６月22日，７月20日）の「客論」参照。

(8) 堀内静宇は３月25日の『浄土教報』139号でその積極的主張を掲げている。また『仏教』72号において堀内は多くの仏教雑誌が同様の意見を持っていることを，「各種の新聞雑誌は万口一斉，同感の意を表し，殊に仏教雑誌に至っては四明餘霞，伝灯，密厳教報，同学，浄土教報，仏教公論，花頂，海外仏教事情，三宝叢誌，教友雑誌，明教新誌，正法輪，国教，能仁新報等は異曲同音大に其計画を賛成し，」と述べている。

(9) 『宗教』第18号，294-299頁。

(10) 『明教新誌』3276号（明治26年８月４日）

(11) 吉田久一はその著『日本近代仏教史研究（全集，川島書店，1992年）』において，明治仏教史を元年から18年までの前期，19年から32年までの中期，33年から45年までの後期と区別されている。政治経済史においては帝国憲法発布期の明治22年を中期の始まりと見る。前期も８年頃までは廃仏毀釈期でもあり，仏教界も視察などを通して欧米から大いに学ぼうとする姿勢が見受けられるが，中期に近づくにしたがい，キリスト教との衝突を強く意識するようになる。国粋主義的，国家主義的仏教の形成期が中期であり，国家権力との分離を意識するようになるのはようやく後期になってからである。

(12) Walter R. Houghton : *Neely's History of the Parliament of Religious Congress at the World Columbian Exposition* (2 vols), Tennyson Neely, Chicago & New York, 1894.

(13) 『釈宗演全集』第１巻，130頁。

(14) 『浄土教報』159号（明治26年10月15日）。

(15) 『明教新誌』3311号（明治26年10月14日）。

(16) 野口は明治26年２月発行の『伝灯』誌上で渡米中の平井金三に教化を受けた一アメリカ人女性の英文論考を和訳している。この女性アニー・エリザベス・チェイニーは『ザ・カリフォルニアン』誌上に「仏教大乗小乗涅槃論」という論文を載せた。平井の影響を強く受けたこの女性は「欧米人士の仏教を誤解する又甚しく，日本仏徒を目するに徒らに偶像礼拝者を以てす。」と慨嘆している。野口はこの一文を翻訳して日本読者にこのような米国女性が存在することを示したかったのであろう。

(17) 西村見暁『清沢満之先生』，法蔵館，昭和26年初版。

(18) 『真宗総合研究所所報』33号に1993 Chicago World Parliament of Religions 参加報告が掲載される予定である。

（本学専任講師　真宗学）